
Deleter事件

ハヤともくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Deleter事件

【Nコード】

N8455M

【作者名】

ハヤともくん

【あらすじ】

月光高校でおきた方法不明の殺害事件は、とある悪魔になぞらえてDeleter事件と呼ばれた。
親友までも被害者にされたシンジは犯人を捕まえることができるのか！？

意地、プライド、約束。

それぞれの想いが絡み合う超本格サスペンス！

第一話 始動（前書き）

はじめは説明ばっかですね。

あと若干デスノートに近いのは許してください（汗

飽きずに最後まで見ていただけると幸いです。

第一話 始動

まずは悪魔の話をしよう。

そいつの名はDeleter。デリーター

そいつは見つめるだけで人間を殺すことができる。

もし実在するなら世界は、人間は、おかしくなっているだろう。

でも、そんなのいるわけない。誰もがそう思っていた。

あの日までは。

江藤 リョウスケ。通称エトー。

エトーは月光高校つきひかりに通う16才。明日になったら二年生だ。

月光高校は生徒数が全国一で、学校もかなり広い。

シンジとエトーはボクシング部に所属している。

シンジとエトーは中学の時に出会い、4年連続でクラスが同じだ。

「正直、仲良すぎてきもちわりい」

シンジのよく言われることベスト5には入るだろう。

ん？シンジって誰かって？

高山 シンジ。漢字で真土。

「お前フルネーム左右対称じゃん！」

これもベスト5に入るだろう。シンジはこっちのほうが気持ち悪い
と思っている。

今日の部活は一年生最後の部活で、シンジはなぜか月日の流れを感じた。

そのせいか、帰り道、シンジとエトーは将来の夢の話をした。

シンジにははっきりとした夢はない。

ボクシングは護身術としてやっているだけだったし。でもエトーは

「幼稚園の先生になりたいんだよね」

と言う。なぜ幼稚園の先生なのかはわからない。

でも、シンジはひたすら羨ましかった。

それは、エトーの目が輝いていたからだ。

（やりたい夢があるっていいなあ）

次の日。

この学校は入学式と始業式を同時に行う。

シンジにとってはそれがめんどくさくてしょうがない。

シンジはそのめんどくさい間も夢のことを考えていた。

（将来どこか今やりたいこともねーし）

めんどくさいのが終わると、皆一斉に教室にもどる。

その瞬間、シンジの3メートルぐらい前にいたエトーが倒れた。

「エトー？どうした？」

シンジや周りにいた奴は心配になりそう呼びかける。

エトーは動かない。

シンジは、いや、生徒全員は状況がすぐには理解できなかった。

しかしシンジは30秒後ぐらいにようやく理解できた。

人口呼吸をする教師。

脈をはかり、ドウコウを見る保健教師。

そして聞こえたこのセリフ。

「救急車はいい！警察をよべ！」

そう、エトーは・・・死んだ。

シンジに悲しみと、疑問と怒りがこみあげた。

「エトー？エトー！！」

なんでだよ！なんでお前が死ぬんだよ！！」

周りの教師に止められながらシンジがさけんでる間に警察がきた。

検視官が少し調べたあと、警察のリーダーっぽい奴がこう言った。

「どこもけがしていない？ふざけるな！」

人間がそんなに簡単に死ぬわけない！！」

部下っぽいのは

「でもあるのはこの丸い跡だけで・・・」

と返す。

その会話を聞いた生徒がどこかでつぶやいた。

「D e l e t e rだ・・・D e l e t e rは本当にいるんだ！」

この瞬間にシンジの「やりたいこと」が決まった。

いや、「やらないといけないこと」と言っべきか。

とにかく、シンジは誓った。

D e l e t e rを捕まえてみせる、と。

4月1日、こうしてD e l e t e r事件は始まったのである。

第一話 始動（後書き）

最後まで読んでくださり、本当にありがとうございます。

初投稿なのでかなり緊張してます（汗

感想お願いします。

第二話 協力（前書き）

第二話です。

少し長くなりましたが、

どうか最後までおねがいします。

第二話 協力

「Delete^{デリーター}だ・・・Deleteは本当にいるんだ!」

こうして始まったDelete^{デリーター}事件。

シンジは一晩中エトーを殺す可能性のある人間を探していた。

「エトー・・・エトー・・・!!」

そう何度も繰り返しながら。

そこでふと思い出した。

「一番エトーと関係が深いのは桜川だな・・・」

桜川 ミナミ。

エトーの彼女で、それも付き合い始めたのは中学三年の時だ。

「あとはブタか」

赤沼 トンスケ。通称ブタ。

高一の時にエトーが殴りとばしたのだ。

二人とも二年で同じクラスだったため、

シンジはとりあえず桜崎とブタを見張ることにした。

次の日。

シンジが教室Ⅱ2-Eに入った瞬間に、

「おい、シンジ！聞いたかよ！」

という声がした。

「お、ケント、ダイ、コウイチ。」

岡村 ケント。 若井 ダイ。 来条 コウイチ。

三人は小学校の時の友達だ。

こいつらとエトーは顔はしっている、という程度の関係だ。

「なんの話だ？」

「昨日、一年が二人やめようとしたらしいんだけど、」とケント。

「二人とも死体で見つかったんだよ！それも、傷がなく、丸いあとがついてたんだって！」とダイ。

「なに！？本当か！」

丸いあと。つまり犯人はDeleter以外に考えられなかった。

シンジは驚き、同時にD e l e t e rに対する怒りが高まった。

「なんなんだよ！なんでそんなに簡単に人を殺せるんだよ！！」

D e l e t e rから逃げるすべはない。そういうメッセージなのだろう。

シンジは我に返った。シンジの大声で、クラス中がしらけていた。

そこで、異常に震えている奴がいた。

ブタだ。

多分パワフルモードの電動ハブラシより震えていただろう。

シンジは、桜川はと思い、見てみると、机に頭を伏せていた。泣いているのだろう。

隣で友達の北宮 ナオが慰めていた。

シンジにはどちらもなにか隠しているようには見えなかった。

この日は登校者数も少なかった為、学校はすぐ終わった。

すると校門に見覚えのある奴がいた。

そいつはシンジにこういった。

「ん？お前はたしか、事件の時に先生達におさえられていた・・・」

そこでシンジは思いだした。

「おまえ、警察のリーダー！」

警察のリーダーは半分キレながらこう言った。

「お前とはなんだ。オレは22だぞ。それに神垣 トモヒロって名前もある！」

「わりいわりい。トモさん、でいいか？」

トモさんは大人げないと思ったのか、簡単に許してくれた。

「まあいいや。お前の名前は？」

「俺は高山 シンジ。よろしくな、トモさん。」

シンジはトモさんとしやべっていると、変な感じがした。

「トモさん。なんで学校にいるんだ？」

「聞き込みだよ。お前・・・じゃない、シンジもDeleterを捕まえたいだろうけど、

オレも捕まえたい。なんとしても捕まえたいんだ！家でお寝んねなんかしてる場合じゃない。」

シンジはようやくわかった。さつきから感じていた違和感の意味が。

（似ているんだ・・・俺とトモさんって。）

「なあトモさん。なんでそんなにD e l e t e rをつかまえたんだ？」

「・・・オレの父さんは、偉大な刑事だった。たった一人で一体何人の命を救ったことか。

父さんは誰かを救うたびにオレにこう言っただよ。

『父さんの命が命を救ったんだ。命って存在は重い。お前も命の重みを知れ』って。

だから・・・ゆるせないんだ。命を簡単に消すあのカスヤローが！」

ちがった。シンジは気づいた。似てるんじゃない、同じだということに。

「ん？どーした？シンジ。」

シンジはある決意をした。

「トモさん・・・一緒にD e l e t e rをつかまえよう！」

「あ・・ああ！よろしくな、シンジ！」

トモさんと協力すること。

そして自分達と同じだということに気づいていたトモさんも、それは同じだった。

第二話 協力（後書き）

最後まで読んでいただき、本当にありがとうございます。

まだまだがんばります。

第三話 裏世界（前書き）

ようやくしっかりしてきました。

今回も長いですが、最後までおねがいします。

第三話 裏世界

神垣 トモヒロ「通称トモさんと協力することになったシンジ。」

「^{デリター}Deleterを捕まえるって言っても具体的にどうする?」
と
トモさん。

シンジはここそ話す必要のない場所、つまり秘密基地のような場所が欲しかった。

そのことをトモさんに話すと、

「それならいい場所がある。」と言われた。

20分後。

そこはいたって普通の家アパートだった。1LDKの部屋を一つ借りているらしい。

「ここはオレと部下一人で使っている。放課後はここにきてくれ。」

「え? 部下一人って・・・」

シンジは今あまり「人」が信用できなかったのだ。

トモさんはそれを察したのか、

「大丈夫。なんせオレの部下だからな。」

といつてくれた。

ドアを開けると、そこには一人の男がいた。

シンジはそいつを見て、つい声がでてしまった。

「あつ！警察の部下！」

そう、そいつはあの時の「部下っぽい奴」だった。

「えー？トモさん、こいつ誰っすか？」と、警察部下。

「こいつはシンジ。死んだエトーの親友だ。ほら、覚えてるだろ？」

あの時教師達におさえられてた・・・と、トモさん。

「ああ・・・で、なんでここに？」と当然の質問をする警察部下。

「簡単だ。協力するからだよ。」と、トモさん。

「ええ！？いいんすか！？」と慌てる警察部下。

めんどくさくなったのか、トモさんは「いーんだよ」と軽くあしらった。

警察部下はまだ「いや、でも・・・！」とあたふたしている。

シンジにはその完全な上下関係がおもしろくなってきた。

「紹介するよ。こいつは多田 ツトム。検視官で、オレの部下でもある。」

ようやく落ち着いたツトムは「よろしくね」と言いながら頭を下げた。

それにあわせてシンジも頭を下げた。

そこでツトムが思い出したようにパソコンを開いた。

「これ、見てくださいよ！」

シンジとトモさんが画面をのぞくと、こんな文字がでていた。

『裏D e l e t e r 』

「なんだこれ？」とトモさんが聞く。

「月光高校の裏サイトみたいです。昨日開かれたみたいですけど。」

裏D e l e t e r。それはD e l e t e rについて自由に書き込めるサイトだった。

ツトムが実際に書きこまれているページを開いた。

そこには、適当に作られたペンネームでいろんなことがかかれていた。

マジこわいよねー 逃げようとした人、みんな殺されたんだろ

？

などの書き込みが多数続いていた。すると画面中央に LORDI NG という文字がでた。

「ほら、こうやってどんどん更新・・・」

とツトムが説明しようとした瞬間に、全員の目が書き込まれた文に集まった。

3丁目の空き地に人が死んでるんだって！

「なに！？どういうことだよ！」

「落ち着いてください、トモさん！ガセの可能性も・・・」

プルルルルル！

ツトムの声を掻き消すようにシンジの携帯が鳴った。

「もしもし？ああ、ケントか。どうした？」

「空き地で北宮が死んでんだよ！」

北宮 ナオ。それはシンジのクラスメートで、桜川の友達の名前だった。

「そんな・・・今いくよ！」

シンジは電話を切り、トモさんとツトムに説明した。

「そんな・・・」とツトム。ぼーぜんとしている。

「とにかくいこう!」

とトモさんが言うてすぐ、ツトムが車を準備した。

空き地につくと、人だかりができていた。するとトモさんが

「シンジ、お前はあまり目立たないほうがいい。野次馬にまじっ
け!」

とシンジに伝えた。シンジは了解し、野次馬に混じる。

ツトムが死体の検視をしたあと、トモさんにこう伝えた。

「死体に傷はありません。あるのは・・・丸い跡だけです。」

トモさんに怒りがこみあげた。

(くそっ・・・! D e l e t e r・・・!!)

シンジは、周りを見渡し、誰がいるのか確認していた。

すると野次馬の先頭で大泣きして、周りの人におさえられている女
の人がいた。

北宮のお母さんなのだろう。それはエトーが死んだ時の自分の様に見えて、

シンジは胸がいたくなった。

そしてシンジはD e l e t e r事件のあたえる悲しみを再び実感した。

第三話 裏世界（後書き）

毎度のことながら、読んでいただきありがとうございます。

次回に期待しててください。

あと感想もおねがいします。

第四話 天才（前書き）

第四話です。

トモさんの出番がかなり少なくなってしまいました（笑

第四話 天才

北宮ナオ殺害事件。

それはDeleter^{デリター}事件の一部とされ、操作打ち切りとなった。

シンジたちはアパートにもどり、推理をしていたのだが、

「やっぱり、犯人の手がかりが少なすぎるな。」

そう言ったのはトモさんだった。

その通りである。ダイニングメッセージはなく、犯人からのヒントもない。

「そういえばツトム。E組のあやしい奴調べとけって言っただろ。どうだった？」

「ああ。僕とトモさんの聞き込みで手に入れた情報をまとめたら、けっこういましたよ。」

「それってブ・・赤沼とか、桜川のことっすか？」

シンジはツトムに自分があやしいと思っていた奴のことを話す。

「いや、赤沼はともかく、桜川はないだろう。江藤のことが好きだったのは確かだし。」

「ぼくがあやしいと思っているのは高橋 コウキだ。」

高橋 コウキ。シンジとは高1の時にクラスが同じだ。高橋が疑われる理由は簡単だった。

「高橋が桜川のこと好きだからですよね？」

「うん。でも高橋の評判は上々。揉め事とかがなかったかしらべてるところだ。」

もう一人あやしい奴がいる。原谷 トシだ。」

シンジは原谷のことは知らず、首をかしげた。

それを見て、ツトムが説明をはじめた。

「原谷 トシ。いわゆる変態で、桜川が被害を受けたとき、江藤と揉め事をおこしているんだ。」

「・・・めちゃくちゃ怪しいじゃないですか。」

トモさんも同意見だった。

「まあ明日はその二人のことも見ていてくれ。」

気がつけばもう20時をまわっている。シンジは家にもどることにした。

20時30分。シンジは家への道の途中にある川をわたろうとして

いた。

そこで、シンジは橋の上に人がいることに気づく。

「あれ・・・？」

どうやらほぼ同年代の女の子のようだ。

「え・・・？まさか・・・？」

今その女の子が橋の欄干にのぼったのだ。

「やめろ！なにやってるんだ！」

シンジは思わずさげんだ。すると女の子はシンジに気がついたが、そのまま靴を脱ぎはじめた。

シンジはいつの間にか走りはじめていた。そして自分も欄干にのぼる。

「死んでなにになるんだよ！馬鹿なことはやめろ！」

「シ・・・シンジくん・・・？」

「え？」

その女の子は中井 ミカ。シンジのクラスメートだった。

「中井・・・なんで・・・？」

「シンジくん・・・止めないで。私はこの世にいい人間じゃないの。」

中井は前かがみになり・・・落ちなかった。

シンジが抱きしめていたのだ。

「命をそんな簡単にすてるなよ！」

中井の頬に涙が流れた。

シンジは我に帰り中井を欄干からおろした。

「さあ、事情を説明してくれ。なんで自殺なんてしようとしたんだ？」

中井は少しの間うつむいていたが、すぐに顔をあげて話しはじめた。

「Deleteer事件で使われてる凶器は・・・私と私の父が作ったの。」

それは、意外すぎる返答だった。一呼吸おいて中井は続ける。

「私は怪物と呼ばれてきたわ。IQ200越えの頭脳を持って生まれたせいで。」

そして私の父はそれを利用した酷い科学者だったの・・・」

そのまま中井過去の話が続けた。

「僕は神に選ばれたんだ！こんなに素晴らしい子供が生まれるなんて！」

中は薄暗く、妙な機械がゴウンゴウンと音をならしている研究室に眼鏡をかけた男が一人と、幼稚園生ぐらいの小さな女の子が一人。

女の子は男に問いかけた。

「ねえパパ。これなに？」

男は鼻息を荒くしてこたえた。

「これはねミカ。人間を一発で殺してしまう、素晴らしい武器、いや、兵器なんだ！」

僕はこれをやさしい人たちに売って、億万長者になるんだよ！！」

「ふん……」

「わかったらミカ、キミの素晴らしい頭でこの仕組みを完成させてくれ！」

「……こうして私はなにがなんだかわからないまま設計図を作ってしまったの。」

「中井の父は今どうしてるんだ？」

「事故で死んだわ。その兵器を完成させた一ヶ月後ぐらいにね。」

シンジはようやく事情を理解した。

「それで設計図を作ってしまった自分が悪いとおもったのか。」

「だって・・・私が生まれてこなければこんな事件はおきなかったのに・・・」

「じゃあ決まりだ。お前は生きるしかない。」

シンジが当然のように言った一言の意味が中井にはわからなかった。

「・・・え？」

「作ってしまった以上、責任をとる必要があるし、なにより、

その兵器を一番知ってるのはお前だ。お前なら・・・犯人、D e l e t e rを捕まえられる！」

シンジの答えは、中井の心に深く、しっかりと入りこんでいった。

「中井。俺は警察とチームを組んで捜査してる。お前も協力してくれ！」

俺には・・・お前が必要だ。」

その瞬間、中井にはシンジが神の様に見えた。そして、決断した。

「・・・うん。私、協力するよ。」

シンジに協力することを。

第四話 天才（後書き）

最後まで読んでいただいております。

状況を表す文を多くしてみました。

感想よろしくおねがいします。

第五話 孤高（前書き）

第五話です。キャラが多くなってきたんで、
うつすら覚えといてやってください（笑

今回は一話と同じぐらいの長さです。

どうか最後までよろしくおねがいします。

第五話 孤高

デリーター
Deleter事件。

その殺人方法を見つけるキーマン、というよりキーウーマン、中井ミカ。

中井のことをトモさんにメールで伝え、シンジは一日を終えた。

次の日。E組に入ったシンジにケント、ダイ、コウイチが近づいてきた。

「おい、シンジ。お前Deleter事件のこと、なんか調べたりしてんのか？」

と、ケントが問う。

その理由はシンジがツトムつまり警察の車で北宮が殺された空き地にきたのを見たからだった。

「ああ。エトーのためにもおれは捕まえてみせるよ。」

「じゃあ、高橋のことも調べといた方がいいよ！」

と、ダイがいったが、コウイチが反論する。

「高橋はねーって！俺と同じ『コウ』が名前に入ってるからな！」

・・・はてしなくどこでもいい理由だ。

しかしシンジは高橋を疑う理由を聞いてみると・・・その答えは意外なモノだった。

「今、高橋が桜川にモーレッツアタックしてるみたいなんだよ!」

「なに!? それで、桜川は?」

「まだつきあたりはしないだろうけど・・・嫌がってはいらしい。」と、ケント。

シンジは、自分の知らない情報を集められることに気づき、ケントにも話題をふった。

「ケント、お前も高橋が一番怪しいと思うか?」

「いや、俺は断然レトリードだな。」

村重 レトリード。日本人とアメリカ人のハーフ。もちろんクラスメートだ。

「俺、席近いからわかるんだけどさ。あいついつもなんか呟いてるんだ。」

マジでこえーよ。頭いつてるとしか・・・」

キンコンカーンコン。

ケントの声をかきけすようにチャイムが鳴り響いた。

「おい、早く席つけー。」

担任で理科教師の長谷部 トオルが声をかけた。

「チツ・こえーなあ。」とケントが一言言つて、全員席に戻った。

理科の時間の途中、シンジはクラスのメンバーの様子を伺っていた。

するとシンジの左の左の前の前にいる市間 タクミが机のかげで

80ページぐらいのノートを読んでいることに気づいた。

すると、そのノートの表紙にはこう書いていた。

『Delete 事件についてのまとめ』

シンジは驚いて声がでそうになった。そう、タクミも事件を調べていたのだ。

授業終了のチャイムがなってすぐにシンジはタクミのところに行く。

「おい、タクミ！お前も情報を集めてるのか？なら情報を・・・」

交換しよう。そう言いたかったのだが、タクミが口を挟んだ。

「僕は誰とも組まないし、誰の協力もいらない。」

タクミは静かに、かつ燃え上がるようなまなざしをしていた。

そう、それはたとえるなら孤高の戦士。

「あいつ、怖いね。D e l e t e rに狙われなければいいけど・・・

」

隣で中井が囁いた。シンジはその言葉をきいたとき、なぜか大きな不安がよぎった。

そう、それはその言葉が本当になってしまつような、嫌な予感だった。

第五話 孤高（後書き）

タクミ「勝手に死亡フラグたてないでくれない？」

いや、名前覚えてもらいたいからってここにまで参加するか！

中井「でもいい作戦じゃない？毎回同じようなこと書くより絶対面白いわ。」

シンジ「そっぴや前回紹介したのに変態野郎でなかったな。」

トモさん「そんなことよりオレ！2話連続出番ほぼなしだよ！」

まあ、次回がんばるから。

全員「感想おねがいします。」

第六話 目的（前書き）

高橋「やりましたよ！」

シンジ「え？なにが？」

（まずい・・・このままだとネタバレに！）

あつ！あつちに原谷 トシが！

シンジ「え？原谷って誰？」

いや、あんたのクラスの変態だよ！

シンジ「ああ・・・忘れてた。」

おい！！読者の皆さんも名前は覚えながら読んでくださいね！

第六話 目的

放課後。シンジと中井はアパートにいった。

「お？そいつが中井 ミカか。よろしくな。」

「僕はツトム。よろしくね。」

トモさんとツトムが頭をさげた。それにつられて中井も頭をさげる。

「それで中井。その兵器つてのはどいうシステムなんだ？」

中井は記憶をさぐりながら話す。

「たしか・・・電気と超音波を発するものだったと思うわ。」

なんでおぼえてんだよ！！

・・・といたいところだが、シンジはなんとかこらえた。

「ところでツトムさん。裏Deleter^{デリター}の方は？」

「ああ。普通だよ。まあ、見つかるわけないけど、

連続殺人犯の話に入るのはかなり度胸がいるからね。ほら。」

もう怖すぎだよ。早くつかままないかな？。

それにしても桜川かわいそうだな。江藤と付き合ってたんだろ？

Deleteer・・・嫌な響きだよ。

ってかなんでDeleteer事件ってよばれてんの？

さあ、オレも友達から聞いたし。

ツトムは画面をどんどんスクロールしていく。

「あれ・・・？」

「どうかしたのか？シンジ」

シンジのつぶやきがきこえたようで、トモさんが反応した。

「いや・・・なんでもない。」

シンジは画面を見て、一瞬違和感がしたのだが・・・気のせいだと思い、深く考えないことにした。

「とりあえず二人とも。学校で情報をあつめてくれ。」

トモさんの一言で、シンジと中井は家に帰った。

次の日。

またしても、シンジのもとに三人が集まってきた。

「よう、ケント、ダイ、コウイチ。」

「おい、ついに高橋の思いが実ったぞ！」とケント。

シンジはおどろいて声がでてしまった。そして、なんとなく周りを見渡すと、

確かに桜川の顔色がかなりよくなっていたのだが、

それ以上に気になったのはシンジ達の会話に敏感に反応した二人。

レトリードと・・・ブタ。

すると同じく異変に気づいた中井がシンジのそばで囁く。

「ミナミ、モテモテね。」

するとさらにブタが驚く。どうやらブタさんは鼻より耳がいいようだ。

シンジと中井はそれ以上なにも情報が入らぬまま、放課後をむかえた。

数分後、アパートで会議がはじまった。

まず中井が話しはじめた。

「犯人がだれか、じゃなくて、目的を見つけて先回りするっていうのはどう?」

トモさんも同意し、意見を述べる。

「まあ、普通に考えれば一番最初のターゲット、エトーは目的の一つだろう。」

しかし犯人「D e l e t e r」がなぜエトーを殺さなければいけないのか？

それがわからなくてとまっているんだ。」

その時、シンジの頭に昨日の違和感がはつきりとした状態でよみがえった。

それにしても桜川かわいそうだな。

頭のなかで紐の結び目が解ける感覚がした。

「D e l e t e rの狙いは・・・桜川・・・？」

全員がはつとする。そしてトモさんがもう一つの結び目を解いた。

「そういえば北宮は、桜川の親友！」

「まちがいないわね。D e l e t e rはミナミを苦しめるために・・・」

と自分で言いながら、中井は思い出した。

「高橋・・・！！！」

シンジもその一言で思い出す。

「高橋が・・・高橋が危ない！」

そのころ、商店街。

そこにいたのは高橋と桜川だ。

そして二人に忍び寄る影が・・・二つ。

第六話 目的（後書き）

トモさん「出番あつてよかったー！」

全員「おめでとー。」

ツトム「出番あつてよかったー！」

全員「いや、別になくてもよかったんじゃないですか？」

ツトム「ええー！？なに、その差ー！！」

全員「こんなうるさい人はほつといて、感想お願いします。」

ツトム「ええー！？」

第七話 高橋（前書き）

シンジ「高橋・・・まってるよ!」

あの・・・前がきるときぐらいいいそがなくても・・・

トモさん「早く情報を・・・」

あゝ・・・もういいよ。早く読んでもらいましう。

第七話 高橋

「セント！桜川と高橋がどこにいるかわかるか？」

「ねえ、ミナミと高橋の居場所知らない？」

Deleter^{デリター}の目的が桜川を苦しめることだと気づいたシンジ達。

シンジと中井はかなり焦りながら桜川と高橋を探していた。

「ダイ！（以下省略）」

「コウイチ！（以下省略）」

シンジも中井ももう電話をする相手がなくなりつつある。

しかしその時、ツトムのパソコンからピーでもない変な音がした。

トモさんが二人を探すよう命じた部下からの合図だ。

「商店街から林の方に行こうとしています！」

ツトムの一言で、全員の目の色が変わる。

「よし！オレ、シンジ、中井はすぐに林に向かう！ツトムはここに残ってる！」

シンジ、トモさん、中井が動きだしたところ。

桜川、高橋は林へと入っていった。

そして、ついに一つの影が動き出す。

それは、仮面をかぶっていた。「恐怖」を形にしたような悪魔の仮面だ。

手には、妙なものを持っている。

それは持つ部分があり、先端には細長い円柱状の物体がついている。そしてなにより特徴的なのはその円柱状の物体の周りについた四つの小さなトゲ。

それにはどうやら電気がたまっているようだ。

桜川と高橋はようやくその者の存在に気づいた。

「な・・・まさか、Delete?」

「そ・・・そんな・・・」

二人はうろたえるが、その者は言葉も発しないまま二人に近寄る。

「怖い・・・怖いよ・・・高ちゃん・・・」

「とにかくにげましょう!」

二人は走って林の奥に逃げ込む。

その者は静かに二人を追いかけていった。

シンジ、トモさん、中井は林の前に到着した。

「よし、オレが中にいくから、シンジと中井は林の外にいるんだ。」

「トモさん！俺も行くに決まってるだろ？」

トモさんは少しキツイ表情で反論した。

「お前達はまだ子供だ！シンジだけならともかく、中井はどうするんだ！？」

二人の方が安全だろ！！」

シンジは食い下がるが、中井を危険にするわけにはいけないと思い、途中で反論をとめた。

しかし、今度は中井が食い下がる。

「この近くにいる警察を集めて。それならシンジが行ってもいいでしょ？」

「・・・わあったよ。」

トモさんはしぶしぶ部下を呼んだ。全部で四人だ。

「よし、シンジ。さっさと行くぞ!」

息がきれる。特に桜川はもう限界だ。

「ううっ!」

「高ちゃん!? あっ!」

先に進んで枝をおしのけていた高橋が、足を切ってしまったのだ。

「大丈夫?」

それかなり深く、血がどんどん流れている。

「ミナミさん、僕はいいですから、早く逃げてください!」

「そう簡単にみつからないよ! ちょっと休んで・・・」

ガサガサ。

「あ・・・ああ・・・」

桜川がふるえる。

二人の進んできた道から、仮面の男が現れたのだ。

しかし、高橋には、もう恐怖はなかった。

「早く・・・早く逃げてください！」

守りたい。

高橋の心にあつたのはそれだけだった。

「でも・・・」

桜川は動揺するが、高橋はそれ以上何も言わなかった。

桜川も、恐怖のあまり、すぐに逃げ出した。

そのころ、アパート。

「な・・・!!」

ツトムは裏D e l e t e rの新たな書き込みを見て、すぐに携帯を取り出した。

「トモさん！」

「!!そんな書き込みが!？」

「どうしたんだ?トモさん？」

「裏D e l e t e rに(今から林で高橋が死ぬ)って書き込みがあったらしい。」

ツトムの子エックがおくれて、10分前の書き込みだ。」

「そんな・・・早くいこう!」

シンジとトモさんが林の奥に進んでいくと、人の声がきこえた。

「人の声・・・?行ってみよう、トモさん!」

声をたよりに進んでいくと、そこには人ばかりができていた。

トモさんが道を開けていく。

「警察だ!どけ!」

シンジも後ろからついていく。

中央にあったのは・・・高橋の死体と、悪魔の仮面。そして、涙を流す桜川だ。

「高ちゃん・・・ごめんね・・・ごめんね・・・!!!!」

シンジとトモさんは、自分の無力さに怒り、唇をかみ締めていた。

そのころ、林の外。

中井は、林からでていく人物を見つけた。

「刑事さん、捕まえてください!」

トモさんの部下たちがその男を捕まえた。

「ありがとうございます。・・・えっ！」

その男とは、赤沼・ブタだった。

第七話 高橋（後書き）

ツトム・・一人で残るとかむなしだね。

ツトム「いえ、僕の仕事つすから。」

さすがただつとむ。

ツトム「名前はきにしないでください！」

ほら、つとむしかないひと。あのセリフいわないと。

ツトム「もう・・感想お願いしまーす！」

第八話 情報（前書き）

もう第八話です。

今回は過去最高の長さなので、じっくり読んでください！

ツトム「お願いしまーす。」

お、さすがただつとむ。でも今回全く出番ないよ。

ツトム「そ、そんな！」

第八話 情報

林の中で殺された高橋 コウキ。

トモさんはシンジを野次馬にまじらせ、全員の顔を見渡す。

野次馬の前側に、シンジやツトム、中井との会議で名前のあがった者がいた。

それは、村重 レトリードと市間 タクミだ。

シンジは野次馬の外側にまわった。

するとシンジに何者かが声をかけた。

「おい、シンジ。大変なことになっちまったな。」

岡村 ケント、若井 ダイ、来条 コウイチの三人だった。

「なんでお前らここにいるんだ？」

シンジが聞くと、三人は首をかしげてお互いを見合った。

するとケントが代表してシンジに話した。

「どうしてって・・・『裏^{デリター}Deleteer』を見たからだよ。お前は違うのか？」

そうか、とシンジは納得した。

今から林で高橋が死ぬ。

あの書き込みはDeleteが野次馬を作るための物だったのだ。
考え込んでいたシンジにコウイチが話した。

「それより、見ろよ。」

シンジはコウイチが指さす方向をむいた。するとそこには見知った顔がいたのだ。

「あつちには原谷、むこうには長谷部のヤローもいるよ。」

原谷 トシ。・・・変態だ。

長谷部 トオル。シンジ達の担任だ。

トモさんは桜川に話しかける。

「高橋とお前はいつはぐれたんだ？」

すると桜川は先ほどの状況を説明した。仮面の者のこと、高橋が自分を守ってくれたこと。

「じゃあ一番最初に高橋を見つけたのはお前か？」

「・・・私は三番目。きた時にはその二人がいました。」

桜川はレトリードとタクミを指さした。

トモさんは今度は二人に問いかける。

「一番最初に見つけたのはどっちだ？」

するとレトリードが口をひらいた。

「ぼ・・ぼくですケド。」

「お前・・」

レトリードが話そうとしたときに、タクミがわって入った。

「こいつを疑ってるの？それはないよ。」

「なんでだ？」

「僕はD e l e t e rを調べてるんだけど、こいつも調べてるんだ。

まあ、お互い協力してるわけじゃないけど。前資料を眺めるところを見たんだ。」

トモさんはその話が本当か確認するため、質問を続けた。

「レトリード、お前はなんでD e l e t e r事件を調べてるんだ？」

レトリードは少しうつむいたあとに話しはじめた。

「エトーさん、とってもいい人デシタ。ぼくのわからないコト、教えてくれた！」

だから、犯人ゆるせません！」

レトリードは声が裏返っていた。

「タクミ、お前は？」

「答える必要はないよ。」

タクミはそう言ったあと、野次馬の中に消えていってしまった。

プルルル。

シンジの携帯がなった。中井からだ。

「二人共林の外に来て！」

「トモさん！」

「どうした？シンジ。・・・なるほど、わかった！」

トモさんは部下たちに後のことをまかせ、シンジと一緒に林の外へむかった。

トモさんは林の外にむかう途中、シンジにレトリードのことを話し

た。

シンジも、レトリードのことをケントにきいていたのだ。

「あいつのこと俺が知らなくても無理ないんだ。」

なんかあいつ、二学年が始まる日、朝きてすぐに保健室いつてたらしいんだ。

それなら、二学年始まってすぐにあつた自己紹介みたいなのでないからな。」

「そうになると、エトーがやさしくしてたのは一年のころか？」

「さあ？そうだと俺も知ってると思うけど・・・」

二人が話してる間に、林の外に到着した。

「おい、中井！いったいどうしたんだ？」

「それが・・・赤沼 トンスケが林から走ってでてきたの。」

二人は驚きをかくせなかった。

「そ、それで、今どこに？」

「むこうでトモさんの部下たちがおさえてるわ。」

「早くそこにつれていってくれ！」

「ぼ、ぼぼぼくじゃないもん！高橋をこ、ここ殺したりしてないもん！」

ブタは盛大に暴れまわっていた。

「・・・おい、お前、殺してないってことはそれ以外になにかしたのか？」

シンジがそう聞くと、ブタは更にふるえだした。

「ち・ちがうもん！メールがきたただけだもん！」

「メール？」

「そ、そうだよ！お前らがおくったんだろ！？」

シンジはかなりイラついてきた。

「どんなメールがきたんだよ！」

「う、裏Deleteってサイトに、
今から林で高橋が死ぬって書き込めって！」

シンジのイラつきはピークに達した。

「それで本当に書き込んだのかよ！誰からきたのかもわかんなかったのに！」

ブタは振幅がひろくなり、目の残像が見えるほどになっている。

「だ、だって！『書かなかったらお前が桜川のこと好きだって言いふらす』って！」

プチン。

シンジの中で、なにかがきれた。

「この・・・ブタヤロー！！！！」

このブタはどうやら飛べるブタなようだ。およそ5メートルは飛んだだろう。

いや、ボクシング部のシンジが飛ばせる人間で、こいつはただのブタなのか。

「シンジ！ストップ！！」

トモさんがシンジをとめた。

「とりあえずこいつに詳しいことを聞こう。」

シンジは5メートル先で首を縦に振りまくるブタがうざくてしょうがなかったが・・・

とりあえずそうすることにした。

第八話 情報（後書き）

ツトム「ほ・・・本当になかった・・・」

ブタでも出番あつたのにね。

ツトム「か・・・感想おねがいします・・・」

さ・・・さすが・・・

第九話 録音（前書き）

ツトム「今回は出番あるんすかねえ・・・」

がつつりあるよ！

ツトム「おお！早く読んでください！」

うわぁ・・・

第九話 録音

シンジ、トモさん、中井はブタをつれてアパートにもどった。

「お疲れ様です。．．え？ブ．．赤沼！？」

シンジはツトムの一言でどれだけがんばってくれてるかがわかった。

「へえ．．．かなり調べてるじゃないですか。」

ツトムはほめられたのがうれしくて、頬をポリポリ書いている。

そこでトモさんが口を挟んだ。

「全くすごかねえだろ。ってかなんでツトムには敬語なんだ？」

シンジはなやむ間もなく答えた。

「トモさんはなんか同年代なかんじがするっていうか．．ガキっぽい。」

「．．なんだと？」

トモさんがシンジにガンを飛ばすが、中井が割って入った。

「ふざけてないで、とりあえずツトムさんに説明しましょう。」

三人はツトムに手に入れた情報の一部始終を話した。

「なるほど。だから赤沼がここにいるのか。」

ふう、と全員が一息ついて、トモさんが話した。

「おい赤沼。お前はそのメールを送ってきた相手を知らないんだよな？心あたりは？」

「あ、あああったら、も、もう言ってるもん。」

始めはシンジと中井だともってたぐらいだもん！」

「ああ、私たちが学校で言ってたこと聞いてたからね？」

シンジも「ああ、そういうことか。」とうなずいている。

トモさんはため息をついてブタに言った。

「心あたりがないんじゃないやあこれ以上ここにいても無駄か。」

まあ書いた奴がわかっただけで十分だ。もう帰れ。」

ブタはなにかに言いたげな顔をしている。

シンジはそれに気づいた。

「どうした？」

「きよ、共犯とかでつかまると思ってたんだもん。」

シンジとトモさんは見合ってちょっとふきだす。

「そりゃあ共犯になりかねないけどこれ知ってるのオレらだけだし。」

「ここはあの一発だけでゆるしてやるよ。」

そう言うとブタは気持ち悪い笑顔で帰っていった。

中井は、ブタを許した二人を見て、安心していった。

「じゃあ、情報をまとめるわよ。」

よし、と四人が円になったときに、パソコンの画面が明るくなった。

画面に LORDING の文字が現れた。あのサイトの・・・更新の合図だ。

五分後。

ある男が北宮の殺された空き地にいた。どうやら誰かをまっっているらしい。

ある男とは・・・市間 タクミのことだった。

「君がDeleter^{デリーター}だったのか。今日のことではつきりしたよ。」

「・・・・・・！」

現れたもう一人の『男』はそれを否定している。

そして、あの妙なものをとりだした。

「それが今まで使ってきた殺人道具だね？いや・兵器とでもよぼうか。」

「・・・！！・・・！！」

兵器をもった男はかなりあわてながらその兵器をかまえた。

「・・・やってみなよ。」

タクミは兵器をもった男にそう言いながら、録音機を取り出した。

「君の声は取っている。もう殺しても無駄だけどね。」

兵器を持った男は体を震わせながらタクミにつっこんだ。

タクミはそれを冷静にかわす。

「理由はD e l e t e r。この言葉自体だよ！」

兵器をもった男はもう一度つつこむ。タクミはそれをかわすが、もう角に追い詰められていた。

「僕がここで死ぬってサイトに書き込んで置いたんだ。君はもう終わりだよ！」

そう言ってタクミは空き地の外の草の茂みに投げ捨てた。

（北宮・君と付き合っていた時間は幸せだったよ。同じ場所で・・死ねるんだ。

タクミは突っ込んでくる男の前に、笑みを浮かべた。

「後は・・・頼むよ。・・・シンジ。」

鈍い音がした後、タクミは崩れ落ちた。

男は息を荒くし、逃げるように去っていった。

僕、市間タクミは空き地で死ぬ。なお、録音機を投げておくから、あとは頼む。

その書き込みを見たあと、シンジとトモさんは空き地に向かった。

ついた時には、タクミが倒れていた。

「タクミ！タクミーーーー！！」

シンジがタクミにかけより、死体を抱きおこした。

「おい、シンジ！野次馬がくる前に録音機を見つけないと！」

トモさんがシンジに呼びかけると、シンジは立ちあがった。

「タクミ、絶対に捕まえてみせるから！」

トモさんが草の茂みで録音機を見つけたが、投げ捨てたせいでヒビ

が入っていた。

「まだあるってことはD e l e t e rは急いでにげたみたいだな。

しかしこれじゃあなおせるかどうか・・・」

トモさんは録音機のヒビを見ていった。

しかし、シンジは携帯をだして、中井に連絡する。

「・・・ああ、そうか。じゃあ今からもどる。」

トモさんはシンジの行動の意味がわからず、シンジに問いかけた。

「何してるんだ？」

「どうやらうちの天才は、20%復元できるらしい。」

トモさんはようやく納得して警察の部下に連絡した。

「オレはもどるから、あとは頼む。」

二人はアパートにもどった。

「録音機、どれ？」

シンジは録音機を中井にわたした。

「もう道具は用意してあるの。ちょっとまっててね。」

10分後。

「かなり内容が少ないわね。復元できたのは一文だけよ。」

全員が復元されたCDのまわりにあつまる。

「じゃあ、音量上げて再生するわよ。」

ザザーツというノイズと、足音がなっている。

足音が止まると、タクミの言葉が流れた。

「理由はD e l e t e r。その言葉自体だよ！」

ここでCDが止まった。

全員が間に少し沈黙の時間があつたが、シンジが気づいたように話した。

「理由がD e l e t e r？それってまさか・・・」

シンジは紙とペンを取り出した。

第九話 録音（後書き）

いやあ、次で決着です！

シンジ「感想よろしくお願いします！」

さすが主人公。こういうところはしっかり取るね。

第十話 真相（前書き）

さあ、真相が明らかになります！

トモさん「なんか異常に長い気が・・・」

前回の倍以上ありますから（笑）

第十話 真相

シンジは紙にこう書いた。

デリター
D e l e t e r

「どついうこと?」

中井、トモさん、ツトムの三人は意味が理解できず、お互いの顔を見る。

「つまり、この言葉の中に、犯人の名前があるってことだよ!」

トモさんが意見をだす。

「連想していくとか?」

シンジは首を横にふった。

「ちがう!この言葉自体が犯人の名前なんだって!」

中井も気がついた。

「まさか・・・並び替えると・・・」

「そう!こついうことだ!」

シンジは紙に続けてこう書いた。

L e t r e e d

三人は「あっ！」と言って口が閉じなかった。

「レ・・レトリード・・・!!」

トモさんはそれしかいえなかった。

「そうだ。あいつは自分がD e l e t e rだと示していたんだ!」

「ツトム!レトリードの情報をもっと!」

「は、はい!」

カタカタカタカタ。素晴らしい速さでツトムが情報を引き出す。

「それにしても・・よく気づいたわね。」

中井が関心の目を向ける。

シンジは「まあな。」と少し照れながら返した。

「どうだ、ツトム?」

「動機になる理由が見当たらないっすね・・揉め事とかもないし・・」

「あっ!」

その声を出したのは中井だ。

「ミナミが高橋と付き合ってたって話をシンジがしてたとき、レトリードも反応してたわ!」

シンジも思い出して大きく頷く。

「それだ!」

トモさんは中央に全員を集めた。

「レトリードは兵器を手に入れた後、桜川と付き合っていたエトー、仲の良かった北宮を殺した。しかしその後、高橋が桜川と付き合い、つてしまい、

高橋をターゲットにしたんだ。そして市間にばれてすぐ、市間を殺した!」

トモさんの話の途中でツトムが「あれっ?」と首をかしげた。

「高橋が殺された時、市間はレトリードをかばったんですよね?

なんで犯人とわかってて・・・?」

その答えには、シンジが答えた。

「あいつは確実に録音したかったんですよ。妙に疑ったら逃げられる可能性がありますから。」

中井もそれに続く。

「あとは・・・あいつは最後まで一人で戦いたかったのよ。プライドが高いから。」

「まあ、そういうことだ。ツトム、市間はそーゆー奴なんだよ。」

ツトムは苦笑を浮かべた。

「話をもどすぞ。問題はこれからレトリードはどうするか、だ。

オレの予想では・・・あいつは桜川を狙うと思う。」

トモさんの意見に全員が同意した。

「桜川を苦しめるのが目的ならそうだろうな。」

「ミナミを恨んでなかったらもともとエトーを殺したりしないだろうし・・・」

それで間違いないんじゃない？」

「そうっすね。事件を長引かせたくないだろうから、早ければ明日にでも。」

「そうになると、レトリードは桜川に振られたことがあるのかもな。」

トモさんがさらに意見をだした。これにも全員が同意する。

「よし、明日の放課後に、レトリードをつかまえるぞ!」

気づけば、もうすっかり夜になっている。

この日は市間の録音で、シンジや中井が狙われないよう、全員アパートで寝ることにした。

次の日。

怪しまれないよう、シンジはトモさんに見守られながら先に登校し、その後に中井がツトムに見守られながら登校する段取りとなった。

そして、シンジとトモさんがアパートの扉を開け・

「うわっ！」

そこには見知らぬ人物がいて、シンジとトモさんは慌てて距離を取った。

「だ・・誰だお前は!？」

するとその男はフツと笑って話しだした。

「一応お前と同じクラスなんだけど。」

「えっ? お前みたいな奴、しらねえよ!」

「俺は渡木 わたりぎ イズミ。まあいわゆる幽霊生徒ってヤツ? うん。それそれ。」

幽霊生徒。つまり在籍してはいるけど全く姿を現さない生徒のことだ。

「まさか、二年になってから一回も学校来てないのか？」

シンジがそう聞くと、イズミは当然のように首を縦に振った。

「な・・・なんで？Delete rが怖いのか？」

するとイズミは首を横に振る。

「失恋した、とか？」

また首を横に振る。

「あつ、イジメか！」

「そんな楽しいことじゃねえよ！」

イジメ、失恋は楽しいらしい。

「じゃあなんだよ？」

「・・・朝起きたら、ハンパない腹痛がおそってくるんだよオ！」

・・・

シンジ、トモさん、イズミの間に沈黙が漂う。

「ふ・・・腹痛で休んでんの・・・？」

「腹痛の辛さがわかってねえ！腹痛より辛いことなんて、それこそ命にかかわるぞ！」

「おい、」

シンジとイズミが話してるところに、トモさんが割って入った。

「腹痛の話はどーでもいい。なんで幽霊生徒がここにいるんだよ！？」

するとイズミは先ほどまでとは全くちがう真剣な眼差しを言った。

「お前ら、Deleter事件調べてんだろ？それで犯人はレトリードだということにいきついた。」

「なんで・・・知ってるんだ・・・？」

シンジがそう聞くと、イズミはスピーカーのような物を取り出した。

「情報収集が得意なのと、盗聴が趣味なのと・・・とあるサイトの管理人だからかな？」

シンジとトモさんに驚愕が走る。

「お前が裏Deleterの管理人！？」

「ああ。犯人を見つけるのに学校に行く必要なんてない。」

こいつは最強か？シンジとトモさんは同じことを考えていた。

「さて本題だ。よく考えろ。レトリードは全ての犯行をこなせるのか？」

「え・・・？」

シンジとトモさんには全くその答えがわからない。

「高橋のとき、シンジ。お前がこの刑事さんに話していただろ？」

「高橋が殺されたとき・・・？」

あいつのこと、俺が知らなくても無理ないんだ。

なんかあいつ、朝きてすぐに保健室に行ったらしい。

「そうか！レトリードはエトーが殺されたとき、あの場所にいなかったんだ！」

イズミは少し笑みを浮かべた。

「まあ、そこまでわかれば大丈夫だな。」

「って・・・お前はなんで犯人を捕まえにいかないんだ？」

「めんどくさいから」そういつてイズミはアパートを去っていった。

「シンジ、レトリードが犯人じゃないなら、Deleterの意味はなんなんだ？」

トモさんはシンジをみると、シンジは考えこんでいた。

「タクミも俺たちと同じ間違いをしていたんだ。でもレトリードがからんでいるのは間違いない。」

いるはずだ。レトリードをあやつっていた本当の悪魔が！」

三十分後。

「そういうことか！」

「ああ、間違いねえよ、シンジ！」

こうして四人は新たな作戦を立てた。

そのころ、学校。

ケント、ダイ、コウイチの三人はシンジを心配していた。

「休んで連絡もないなんて・・・あいつ、大丈夫だろうな・・・」

すると三人にある女が声をかけた。

「シンジくんはDeleteer事件の犯人がわかったって言うってたわよ。」

つかまえる作戦でもたててるんじゃないの？」

そう言ったのは中井だ。

「！！声でけえよ！」

中井が周りを見渡すと、クラスの生徒全員が中井に注目していた。

「あ、すいませーん。」

（視線・かなり強い視線が混じってるわね。まあ、作戦成功かな？）

「気にしないでくださいねえ。」

中井は笑顔でそう言って、席に座った。

放課後。

レトリードは校門をでて右に曲がり、ちよつとせまく、

人がほとんど通らないような道に入っていた。

「まてよ。」

レトリードの前の曲がり角から男が一人と女が一人でてきた。

シンジと中井。

「な・・なんデスカ？」

「よう、Deleter。」

「どういいうみデスカ!？」

レトリードはシンジの一言で一步後ろに下がる。

「お前は自分を振った桜川が許せなかったんだろ？」

だからエトーと北宮と高橋を殺したんだ!」

レトリードは慌てて首を横に振る。

「ち、ちがいマスヨ!」

「そしてレトリードがDeleterであることに気づいてしまったタクミも殺した!」

レトリードは汗だけで声も出なくなっている。

「お前の名前を並び替えると、Deleterになることに気づいたタクミをなあ!」

「ちがいマス・・ちがいマスヨ!」

「こういう推理をさして、レトリードを捕まえさせようとしたんだろ?」

「え?」

レトリードはシンジの目線が自分の後ろにきていることに気づき、後ろを振り向く。

「出てきなよ。本当のD e l e t e r。」

シンジが呼びかけるが、なにも起きない。

「その曲がり角にいるんだろ！？桜川ア！！！」

すると曲がり角から本当に桜川が現れた。

「やっぱりな。」

「な・・・なにか勘違いしてない？私は犯人が誰なのか気になってここに・・・」

「お前の作戦はこうだ。」

桜川の話を見殺しにしてシンジが話し始めた。

「まず兵器を裏ルートかなにかで手に入れたお前は、人ごみにまぎれてエトーを殺した。」

そしてその後レトリードに「言うことをきいてくれたら付き合っ
てあげる」みたいな事を言い、

一年生二人と北宮を殺させた。そして高橋のときは同じく自分に
告げて来たことのある

ブタをつかって人だかりを作った。しかしここで一つお前はミス

をおかしてしまった。

本当は自分と高橋についてくるのはレトリードだけなのにブタもついてきてしまい、

俺たちにブタが捕まってしまったんだ。」

シンジの話に、桜川が反論した。

「私が命令した証拠なんてないじゃない！エトーくん達を殺す動機も！」

「あるんすよ。」

桜川が後ろを振り向くと、そこにはトモさんとツトムがいた。

「け・・・刑事さん・・・」

「今あなたの母に頼んで部屋を調べさせてもらったところ、大量のお金と

エトーくん、北宮、高橋の通帳がみつかりました。動機もこのお金つすね？」

ツトムが話し終わると、トモさんが一歩前に出て言った。

「金なんかの為に何人も殺しやがって・・・お前は命の重みを知れ！」

(く・・・くそ・・・)

「この世は金が全てよ！レトリード、暴れちゃって！」

桜川がレトリードの方を向き、叫んだときにはシンジがレトリードを捕まえていた。

「あ・・・」

「みとめたな？自分が犯人だと。」

「え？・・・あつ！」

トモさんが桜川をとらえた。

こうして、二人は捕まり、次の日からテレビではこの話でもちきりになった。

「えー、この月光高校でDeleterとなのる連続殺人犯が捕まりました。」

シンジ達四人はアパートでそのテレビをみていた。

「いやー、トモさん、ツトムとも、これでおわかれか。」

「まあ、どこかで会っさ。」

「そうですよ。」

プルルル。

シンジの携帯がなった。

「もしもし。．．ああ、ケント。え？裏D e l e t e r？わかった。

」

「どうした？シンジ。」

「裏D e l e t e rを見ろって。」

ツトムがパソコンを開いた瞬間に全員の目に信じられない文が飛び込んできた。

「そんな．．」

「どうやらおわかれはまだまだ先だな。トモさん。」

「そつらしい。」

D e l e t e r様に逆らう外道ども！我が裁きをくだしてやる！
我は二代目D e l e t e rだ！

第十話 真相（後書き）

と、いうことで次からは第二部です！

シンジ「ぜってー捕まえてみせる！」

あ・・あの、ここ意気込みを伝える場所じゃないんで。

ツトム「出番いっぱいあって幸せだー！」

お前は毎回それだな。

中井「感想、評価お願いしまーす。」

シンジ、ツトム「と、とられたー！ー！」

第十一話 二代目（前書き）

シンジ「なんか更新が遅いわりには短いような・・・」

だって、パソコン動かなかったんだもん！

中井「せっかく第二部に入る大事なことだったのに・・・あゝあ・・・」

だから僕のせいじゃありませんって！

第十一話 二代目

Delete様に逆らう外道ども！我が裁きをくだしてやる！
我は二代目Deleteだ！

シンジ、トモさん、中井、ツトムの四人の目にそんな一文が飛び込んできた。

「俺たちへの宣戦布告・・・か？」

最初に口を開いたのはシンジだった。

「こいつ、Deleteとレトリードの関係にはおそらく気づいていないな。」

そのシンジの言葉に、全員がうなずく。

そして全員はもう一度パソコンに向きなあった。

「裁き・・・」

中井は考えこみながらつぶやいた。そして、とある考えが浮かんだ。

「まさかこいつ、Deleteが無差別に人を殺してたと思ってるんじゃない？」

それを様ってよんでるってことは、裁き ってのは、自分が変わりに殺すってことなんじゃ・・・」

「そんな・・・」

話をきいたツトムがふるえあがっている。

「シンジ、中井。明日からの学校は常に周りに気をつける。」

こいつの言い分的に、一番ねられやすいのはお前だからな。」

トモさんがまとめて、四人は解散した。

次の日。

「なんだこれ・・・？」

シンジは学校にいつて呆然とした。

学校は静かで人気もかなり少なかったのだ。

「よう。」

そんなシンジに声をかけたのはケントだった。

「俺もこの静かさには驚いたけど、当然といえば当然だ。」

なんせ、昨日20人殺されたんだからな。」

「2、20!？」

「ああ。頭がオカシイんだよ。そいつは。」

ケントは下を向くシンジの顔をのぞきこむようにして続けた。

「で？犯人の目星はついてんのか？」

シンジは首を横にふった。すると、

「まあ、今日学校にきてる奴らの中にいるんだろっけだな。

同じクラスなら中井、原谷、ブタの他に、柿崎 キセキ、藤田 カズシ、坂本 ノゾム、

榎本 ナツキ、倉石 ミユキ、北條 フウガ、滝 レンタの七人
だな。」

ケントは、それぞれ指をさしながら話していく。

シンジはそのメンバーを手帳にメモしてケントとわかれた。

もちろんこの日も、学校はすぐに終わった。

放課後、四人がアパートに集まる。

全員20人殺害されたことに驚きを隠せなかった。

「まちがいない。そいつの目的は、より多くの人間を殺すことだ。

だが20人となると、一人じゃない可能性も・・・」

「あ」

トモさんが話してる途中に、ツトムが口を開いた。

「そういえば、殺された20人の大半は丸い跡のほかに、

ナイフで刺された傷があっただけですよ。」

「・・・複数犯ってことで間違いないわね。」

ツトムの話を聞いた中井がトモさんの意見に同意した。

「でも、人殺すことに賛成するようなのがそんなにいっぱいいるのか？」

シンジの問いに中井は少し考えた後に答えた。

「まあ、多くて三、四人でしょう。」

三、四人。その人数の中に知り合い、友達がいなかったことをシンジは全力で願った。

第十一話 二代目（後書き）

なんかいっぱい名前でてきたけど、後々説明するんで、

存在だけ覚えといてください（笑

全員「というわけで、感想、評価、お願いします！」

第十二話 教会（前書き）

第二章、いかがでしょうか？

中井「あなた・・・日があいたからあせってるの？」

ぎくっ！

ツトム「だ・・・だいじょうぶですよ！」

お前だけには励まされたくない！！

第十二話 教会

「・・・くそっ」

シンジは落ち着かず部屋を歩き回っていた。

犯人が何人もいて、もう二十人も殺されている。もはやいつ知り合いが殺されるかわからない。

そんな状況でなにもできない自分への怒りがこみあげていたのだ。

そこでツトムが声をかける。

「シンジくん、気持ちが悪く落ち着かないのはわかりますが、今はどうしようもないっすよ。」

「落ち着けるわけじゃないですよッ!!」

しかしシンジはそれをふりはらった。

「このままじゃ、友達が殺されるのを黙ってみてることになるんすよ!？」

俺はどうすれば・・・」

その時、とある人物の顔が浮かんできた。

(トウリ・・・あいつなら・・・)

「どうしたの？」

「錦戸 トウリってヤツに会ってくる。」

「トウリ！？何を言ってるの？」

中井はシンジの発言が信じられなかった。

それを見ていたトモさんとツトムは首をかしげていた。

「そうだ・・・トモさん、今日学校に来てたクラスメートを書いたから、調べといてくれねえか？」

「たいした情報はないだらーけど。」

シンジは申し訳なさそうな顔で頼んでいる。

「バカ言ってるじゃねえよ。どんだけ面倒でも、どんだけ意味なくても調べてやるよ。」

・・・ツトムがな。」

「え！？僕ですか！？」

トモさんは半分ふざけながらやさしくうなずいた。

「頼みましたよ、二人共。」

そしてシンジは外へでようとしたが、中井が止めた。

「待つて！私も行くわ。」

中井は軽くウインクをしてみせる。

「わかったよ。」

シンジは軽く笑いながら答えた。

「おい！それで、トウリってのはどついうやつなんだよ？」

トモさんの質問に、

「犯罪者。」

そう答えてシンジと中井はアパートを出た。

「この感じだと、5時には少年院むじゅうに着いて、帰るのは10時をまわりそうね。」

「そうだな。」

そのころ・・・とある教会。

「・・・時間だ。」

怪しい人物と、それを取りまく十ほどの人間。

「みなさん、準備はいいですか？・・・そう、それぞれの復讐の準

備は!!」

「うおおおおおおお!!!!」

「さあ行きましょう。今こそ・悪魔による天誅のお時間です!」

一時間後・

少年院へと進む途中、中井が道の先に人だかりを見つけた。

「シンジ・あの人だかりはなに?」

「嫌な予感がする・・・行こう!」

そこには、シンジには信じられない光景があった。

「う・・・うそだろ・・・?」

そこにあったのは・・・若井　ダイの死体だった。

「ダイ!ダイ!!!」

二代目Deleterの魔の手が・・・ついに来てしまったのである。

第十二話 教会（後書き）

トモさん「何？オレらの出番なくなるの？」

ツトム「そんなあ・・・」

ここにだすから許してくれ（汗

トモさん&ツトム「感想ヨロシクッ！！」

機嫌なおんの早っ！

第十三話 錦戸（前書き）

トモさん「なんだ、出番ありそうじゃん。」

いやあ、さすがに可哀そうだと思ってね。

ツトム「僕・・・セリフないんですけど・・・」

・・・ドンマイ！

第十三話 錦戸

「ダイ……くそっ!!……」

「シンジ……」

シンジはダイに走りよる。

中井は一言つぶやくだけ。 なにか言いたかったんだろう。

しかし言葉がみつからなかったのだ。

シンジにとってこれほど屈辱的なことはない。

大量殺人を簡単にできるような連中に、友達が殺されたのだから。

中井にはそれがわかっていたのだ。

シンジが人ごみをかきわけて進み、冷たくなったダイを抱き上げる。

すると、手に信じられないものがついた。

そう、赤く染まり、生暖かいもの

「血……!!……」

「え!?!?どういこと?」

「なぜだ……?兵器で殺されたなら丸い跡が残るだけ。」

血がでるはずがない・・・あっ！」

シンジが驚くのも無理はない。背中にナイフの刺し傷があったのだから。

「どいてくれ！警察だ！」

「え・・・？トモさん！」

「おう、随分早い再会だったな。」

「それより見てくれ、背中に刺し傷が！」

「！！・・・とにかく、ここはオレにまかせろ。犯罪者に会いに行くんだろ？」

そう言って、トモさんはツトムと一緒に死体の検死をはじめた。

「早く、行こつ、シンジ。」

「・・・ああ。」

さらに三時間後、

「ここね。」

門番のような人かけよる。

「錦戸 トウリと面会させてくれ。」

カツカツカツ。

「・・・久しぶりだな、トウリ。」

「フフ・・・面会なんて初めてだよ。」

「お前と会うのは一年ぶりぐらいか。」

トウリは少年院にいるとは思えないほど冷静に、平然と話している。

「で？何の用だい？」

「最近月光高校では連続殺人がおきてる。」

「ふうん。」

「犯人はグループだ。しかし俺には殺人に協力する連中の気持ちがわからない。」

「なんで人を殺すような奴がいるんだ？」

少しの沈黙のあと、トウリは話した。した。

「復讐・・・かな。」

「復讐・・・」

「殺したいって思うぐらいのことがあったとき人間はかなりゆがんでしまうんだ。」

もしその状態で話術のある奴にそそのかされれば・・・憎しみは数倍にふくれあがる。」

「なら・・・殺された奴はみんなにかやった奴ってことか？」

「あとは・・・信教。」

「信教？」

「・・・これはもう洗脳に近い。多くの命をささげること。」

そうしなければ裁きをつけることになるとおもっているんだ。

もしそうなら・・・そいつらは最終的に自分の命をささげるだろう。

神・・・いや、悪魔に。」

「悪魔・・・裁き・・・」

「おそらく主犯はそれだろうね。」

「そんなの・・・どうすれば・・・」

「命の価値を教えてやりなよ。あのとき、僕に言ったみたいにさあ。」

「・・・そうだな。ありがとう。そろそろ時間だから帰るぜ。じゃあな。」

そう言ってシンジは部屋を出ていった。

「フフ・・・そろそろ頃合いか・・・」

部屋に残されたトウリのつぶやきを知る者は・・・いない。

第十三話 錦戸（後書き）

トウリ「フフ・・・」

お前こええな（汗

トウリ「感想よろしくね・・・？」

それじゃ書く奴いねえよ（汗&汗

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8455m/>

Deleter事件

2010年10月9日20時52分発行